



△ヒゴアサガオ

### カーネーションづくり

熊本市御幸木部町

栽培業者 松村 造酒夫

「花」それは私が農業という道への横索の中で、好きである事は勿論、自然に支配されず理想的な農業生活が実現出来る事、そして、父の戦死という女だけの家庭環境の中で最過で、然も、将来の社会経済成長と共に需要は大幅に伸びるであろう、という考えの基に、カーネーション作りを始めたのです。卒業と同時に五十六坪のビニール障子を組み合せた木材の大型温室を義兄達の指導の下に、夜は十二時過ぎ迄、切り込みを行い自分の手で建てました。その時の嬉しさは今でも忘れる事は出来ません。カーネーションは定植したもの、とにかく花が咲いてくれさえすればいい、という一念でした。ある時は、一本一本丹精を込めて育てている苗を犬猫に荒され、雨風には新しいビニールを吹き破ら



### 花との語り

り、情緒があり真実があります。まさしく生きているのです。私はそれ故に私の人生を、花にかけているのかも知れませんが、

れ、冬はボイラー室に泊り込んで、一時過ぎに起きて、温室内を見て廻ったり、火が消えている時は慌てて炊きつけ、早く暖かくなれ、と気をもんだり、本当に大変なものでした。十三年目を迎えた今日迄、青年団活動に没頭し、国際農村青年交換日本代表として米国に派遣された間の花へのブランドをも含めて、農業への信念とファイトを得、現在は栽培面積六百坪、付帯ハウス百二十坪、内最新型アルミ温室三百十二坪を建設しカーネーションの周年栽培を行っており、

す。夜電氣をつけて一人温室内に佇み、月の光の中でガラスにカーネーションの青々さが映え、その先端が広く力強く生き生きとしている様を見る時、その美しさに思わず見とれます。誰もが手にする一本のカーネーション、その一本に、私達生産者の一生懸命、より美しい花を

願い育んでいる心の手が何十回触れているでしょう。花が無残に扱われ、捨てられている時寂しくなります。花には自然しか創出し得ない神秘的なもの(形色・香・他)があり、美があり、情緒があり真実があります。まさしく生きているのです。私はそれ故に私の人生を、花にかけているのかも知れませんが、

ところではありますが、県民総参加の行政といわれるこの運動に地域住民の方々

が十分な理解を示して組織的に協力し、行動に移していただいた結果にほかならないと考えます。

さて、これからの課題として、この運動をさらに持続し、積極的に展開していくために私たちは運動のすすめかたについて、もう一歩踏み込んだ取り組みかたをしていく必要があります。つまり、美しくするということをたんに形のうちだけでなく、心の持ちかたの二つの面で捉えて、これが結びついた運動として深めていくということです。

前述のとおり、過去三年のあいだには見た目の美しさという点では、たしかにこの運動の評価はありました。例えば、この春にシンボル花壇を飾ったパンジーの群は大変好評でしたが、その一輪の花には苗を作るまでの苦勞と思いやりがこめられています。このようなことを道行く人が知っているならばパンジーの花を無惨に引き抜いたり、踏みつぶしたりすることはなく、又、チリ屑やたばこの吸



△ヒゴツバキ

### 「美しい熊本づくり」の新しい展開

#### 具象の美から精神の美へ

県が、わがふるさと熊本を美しく快適な環境とするために、昭和四十七年度から「環境の緑化」、「自然の保護」、「郷土の清掃浄化」を三本の柱として県民に呼びかけ推進してきた「美しい熊本づくり運動」は、お蔭で多くの県民の方々の理解と協力を得て、着実な成果をもたらした四年めを迎えました。

先ず、この運動を象徴するために、熊本市内のメイン・ストリート(熊本市市民会館前から熊本東郵便局前までの県道)約三・八軒にわたり道路花壇を造成し、四季折々の美しい草花を咲かせて道ゆく人々に今日大変親しまれておます。

「環境の緑化」の面では、熊本市の空の玄関である熊本空港周辺に、広大な緑地帯が造成されつつあり、また県内を縦横に走る国、県道の沿線には、市町村の協力をいただいて「ムクゲ」や「夾竹桃」などの花木をはじめ、街路には落葉樹、常緑樹なども数多く植栽されて、沿道の修景をおさめておりますが、市町村自体が県の助成をうけて道路沿線や公園、広場の緑化に努力された実績を合わせますと植栽量は実に十一万本以上に及び、それだけ緑の総量が増加したことになりました。このほか、県下に花いっぱい運動を



△ヒゴハナショウブ



△ヒゴサザンカ

地域の人々が、お互いに花づくりの体験をおとして得た話題と共感が、地域美化への関心と連帯感をつくりあげ、次には村づくり町づくりへと結集されて、花と心を結ぶ具象の美から精神の美へと新たな深みと展開をみせることは、さして遠い道りではないと信じます。折りしも「新しいふるさとづくり」の提唱に対するアプローチとして、私たちは、県民総参加の行政といわれる美しい熊本づくり運動の地道な経験を踏まえながら、いま一度ふるさととの自然や環境に目を止めて創意をもやし、美しく心ゆたかな地域づくりに取り組んでいこうではありませんか。

### 産業としての花き園芸

#### 望まれる産地の規模拡大

本県の花き園芸は、大正末期から昭和初期にかけて、熊本市田辺町でカーネーションを主体とする温室での切花栽培と、天草郡大矢野町でキンセンカを主体とした露地での切花栽培が行なわれるようになったのが始まりです。その後は、年々栽培面積も増加し産業としての基盤ができてきたが、戦争中の食糧増産で花き類はほとんど栽培されなくなってしまうが、戦後再び栽培が始められまし

一、県下に見る花き園芸の現況  
本県の花き園芸は、高冷地域、平坦地域、海岸の無霜地域とそれぞれの地理的な条件によって、生産地の形成が行なわれており、菊、カーネーション、バラ、カラーやキンセンカなどの暖地草花、またりんどう等の高冷地草花などそれぞれ特色ある生産が行なわれています。本県における品目別の生産状況(昭和四十八年実績)をみると、栽培面積では、全体で二百十八ヘクタールのうち菊が二七・六%で最も多く、次で枝もの二五・二%カーネーション三・二%、バラ三・〇%の順となっております。これを生産額で見ると、菊の二七%をはじめ、カーネーション一・九%、枝ものが八・七%、バラ八・三%、鉢物六・九%、ユリ三・六%等が主なものとなっております。花きの生産が行なわれている地域は、熊飽(熊本市、飽託郡)、宇城(宇土郡市、下益城郡)、鹿本、菊池、上益城、八代、天草を中心に生産が行なわれています。